

枯れた骨の復活

[聖書]エゼキエル書 37章 1～14節

主の手がわたしの上に臨んだ。わたしは主の霊によって連れ出され、ある谷の真ん中に降ろされた。そこは骨でいっぱいであった。主はわたしに、その周囲を歩き巡らせた。見ると、谷の上には非常に多くの骨があり、また見ると、それらは甚だしく枯れていた。そのとき、主はわたしに言われた。「人の子よ、これらの骨は生き返ることができるか。」わたしは答えた。「主なる神よ、あなたのみがご存じます。」そこで、主はわたしに言われた。「これらの骨に向かって預言し、彼らに言いなさい。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。これらの骨に向かって、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。わたしは、お前たちの上に筋をおき、肉を付け、皮膚で覆い、霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。そして、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。」

わたしは命じられたように預言した。わたしが預言していると、音がした。見よ、カタカタと音を立てて、骨と骨とが近づいた。わたしが見ていると、見よ、それらの骨の上に筋と肉が生じ、皮膚がその上をすっかり覆った。しかし、その中に霊はなかった。主はわたしに言われた。「霊に預言せよ。人の子よ、預言して霊に言いなさい。主なる神はこう言われる。霊よ、四方から吹き来れ。霊よ、これらの殺されたものの上に吹きつけよ。そうすれば彼らは生き返る。」

わたしは命じられたように預言した。すると、霊が彼らの中に入り、彼らは生き返って自分の足で立った。彼らは非常に大きな集団となった。

主はわたしに言われた。「人の子よ、これらの骨はイスラエルの全家である。彼らは言っている。『我々の骨は枯れた。我々の望みはうせ、我々は滅びる』と。それゆえ、預言して彼らに語りなさい。主なる神はこう言われる。わたしはお前たちの墓を開く。わが民よ、わたしはお前たちを墓から引き上げ、イスラエルの地へ連れて行く。わたしが墓を開いて、お前たちを墓から引き上げるとき、わが民よ、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。また、わたしがお前たちの中に霊を吹き込むと、お前たちは生きる。わたしはお前たちを自分の土地に住まわせる。そのとき、お前たちは主であるわたしがこれを語り、行ったことを知るようになる」と主は言われる。

[序]忘れずに覚え続ける

私たちの川越教会が1968年5月5日に岸町のアパートの一室で、小久保富茂・信子牧師夫妻と**第一回の日曜礼拝**を守ってから**48年余**たちました。また1985年6月23日に教会員33名で**教会組織感謝礼拝**を守ってから**31年余**がたちました。この間に教会員の中で地上での信仰の生涯を終えて**永眠**された兄弟姉妹は、記録によりますと**10名**です。

シンガポールから帰って来た私達夫婦が、川越教会にお仕えするようになって9年余になりましたが、私の代になってから召された方は4名です。そのうちの3名の方々はよく存じていますが、7人の方がどのように教会生活を送られたのか存知上げません。でもどの**兄弟姉妹も川越教会を愛し、礼拝を共に守り、教会の交わりと働きを豊かにして下さった大事な教会家族**であったことに変わ

りありません。ですから私たちは、いつまでも**忘れずに覚えて感謝し**、主のお守りを祈り続けて参りたいと思います。

そこで2012年に教会墓地を購入し、2014年から追悼文集を作成して、永眠者記念礼拝を守るようにしました。昨年の第2回目には、皆さんの協力で思い出を少し補充することも出来ました。牧師交代の時期も迫ってきましたので、来年にかけて教会員皆で追悼文集の充実に取り組み、永眠者記念礼拝を豊かにしていただきたいと願っています。

[1] 10人の面影

今日の週報では礼拝プログラムの右側に永眠者と教会墓地に納骨した方の一覧表を記しました。先ず教会員在籍者で永眠された方 10 名をご紹介します。

田中 秀 姉は、オルガン奏樂の奉仕をされている伊藤三恵子さんの母上です。**女子聖学院中高校の教師**を 40 数年なさいました。三恵子さんは、女子聖学院中学3年になった4月のイースターに、目白ヶ丘教会で**バプテスマ**を受けましたが、高円寺教会員のお母さんは自分の時よりも嬉しいと喜んで、目白の礼拝に出席して、副牧師の私にも何卒宜しくとご挨拶くださいました。今もよく覚えています。**現役を引退されてから**、川越教会に転入会され、毎週水曜日自宅での家庭集会を楽しみにし、晩年には福島教会に転任された小久保牧師夫妻に会いに、福島を訪れて礼拝にも出席されたそうです。

高柳しげ子姉は、**高柳千代姉**のお嬢さんです。病弱で、お母さんが晩年に転んで左腕を骨折し、曲がった腕の矯正のために再入院中の病院に、しげ子さんも脳腫瘍で倒れて入院し、お母さんがそのまま病院に泊まり込んで、しげ子さんの看病に当たったそうです。その時に、長い間の懸案だった信仰の決心が与えられ、藤沢牧師から**病床洗礼**を受けました。「おめでとう」という言葉に「これで母と同じ所に行けます」と返事された由。一か月も経たずに永眠されました。

高柳千代姉は、岸町のアパートでの川越教会**第一回の礼拝出席者**です。小久保牧師夫妻と後藤陽子姉と4人の礼拝だったそうです。37 才で夫と死別し、二人の娘さんを育てるために、ジョンソン基地のハウスメイドとして働き始めました。そしてグラント宣教師の聖書研究会に出席し、同じ川越から通う後藤姉と親しくなり、**大宮教会**で二人一緒にバプテスマを受けました。そして川越開拓が始まるとともに川越伝道所の会員になったのでした。以来ほぼ **30 年間**、教会のために奉仕してくださいました。そして念願の聖地旅行に二回参加し、**エルサレム**で召されたのでした。

岩井慶司兄は、千代田生命の浜松勤務時代、26 才の時に浜松教会でバプテスマを受け、**42 才の時に宇都宮教会から川越教会**に転入会されました。ご夫婦もお子さん達もがっしりとした体格の一家だったそうです。オーストラリアに移住して晩年を過ごそうと会社を早期退職し、家財も整理していざ出発の段階で、どうしても就労旅券が取得できず、やむなく計画を変更。住居も教会から遠方となって、礼拝出席も遠のいてしまわれました。**交通事故**で亡くなった由。もっと連絡をとり続ける

べきだったと、残念です。

丸田志加姉は、小名木裕子姉の母上です。明治41年に東京の深川で生まれ、女学校時代に関東大震災で家を失い水戸に転居、やがて東京に戻られました。和英タイプを習い、霊南坂教会にも通いました。イギリスの国歌を英語ですらすらと歌う人だったそうです。日清製粉に勤め、同じ職場の丸田将男兄と結婚、川越に暮すようになりました。晩年に裕子さんが通う川越教会の礼拝に出席するようになり、**79才のクリスマス**にバプテスマを受け、90才で永眠されました。優しい母で、裕子さんには厳しく叱られた記憶がないそうです。

三木 圭子姉はYWCAでタイピストをされ、英語が堪能、資生堂のポスターのモデルをなさったそうです。埼玉に移住するようになり、**76才**の時に川越教会に転入会されました。依然としておしゃれで知的な方で、都内に出かけて聖書講座を受けておられました。**聖書の読み方**がユニークで、大いに刺激を受けたそうです。ご主人の常緑(ときわ)さんの葬儀は、教会員ではありませんでしたが藤沢牧師の司式で行われました。礼拝の終わりによく歌われる頌栄541「**ときわ**にたえせず みさかえあれ アーメン」を歌うと、**主人を思い出す**と、よくおっしゃっていたそうです。本当に優しい母で、叱られた思い出がないと、娘の志津子さんが語っておられます。

金田禮子姉の72年の生涯は、**入退院を繰り返す闘病生活**だったようです。藤澤牧師夫妻がよくお世話されていました。しかし72才の禮子姉が入浴中に倒れて急逝された時、ご家族は**川越教会が無牧師だ**と思って、夫の尚哲さんの家族が初雁教会員なので、山岡牧師に川越斎場での葬儀の司事を依頼されたのでした。私はその2年前から赴任していたのですから、これは牧会上の大失態です。藤澤先生を通してその事実を知り愕然としました。ご本人はもとより、ご家族に対しても、教会員の皆さんに対しても、本当に申し訳なく思います。二度とこのようなことが起こらないように、皆さんと一緒に心がけて、教会員の交わりを緊密にして参りましょう。

菊地敏明兄は、ピアノの上に掲げられている**聖句**「見よ、兄弟が共に座っている なんという恵み なんという喜び」(詩編 133:1)を書きのこしてくださった兄弟です。この書と共に今も礼拝と一緒に守って居られます。満州育ちで、敗戦後の引き揚げ者。海上自衛隊時代に青山学院大学を卒業。**書道**に打ち込み師範となりました。**自動車好き**の絆で小久保牧師と結ばれ、川越教会に腰を据えることになりました。多芸多趣味、話題が豊かで、二人で話をし始めると、あっという間に2~3時間たちました。

磯部信之兄は、2012年4月4日に念願の教会墓地が完成、8日(日)イースター礼拝後に墓地に行き、彼の司式で奉獻感謝礼拝をしました。ところがその翌日に虚血性心疾患で急逝されたのでした。そして墓地委員の彼が**教会墓地に第一番に入墓**されました。磯部兄といえば礼拝ばかりでなく水曜夜の祈祷会も**皆勤出席**、牧師にとってこれほど心強い支え手はいませんでした。亡くなる3月前のコラムに75才誕生日の心を聖歌622にたくして語っておられます。「夕べ雲焼くるを見れば、業やむる時の間の間近き今、神の前に**我いそしまん**」。

鈴木郁男兄は、菊姫さんと再婚なさるに当たって、川越教会の礼拝に出席し始めました。しかし2年後に癌におかされて入退院を繰り返され、自分から病床洗礼を申し出られました。そこで礼拝の席上で皆さんに報告して承認を得、礼拝後に鈴木宅に伺い、洗礼式を行いました。普段礼拝に出席しておられた近所の国際教会の大澤牧師始め会員有志も参加して下さいました。私たちは主から癒しを頂いて、教会生活を守れるようになることを期待しましたが、翌日呼吸困難に陥り急逝されました。郁男兄自身が神の時を示されて洗礼を申し出られたのですね。自分の終わりの時を知ることの大切さを教えられました。

次に教会墓地の納骨者を紹介します。墓地が出来てから永眠された教会員の磯部兄、鈴木兄が、葬儀の後で納骨されました。また教会員の家族6人も納骨されています。松永光暁・敦子夫妻は飯塚美也子姉の両親です。秋田の実家がお寺と縁の深い家でしたが、両親の代にお寺との縁が切れたので、兄・姉の了承を得て、美也子姉が分骨を川越教会の墓地に納めました。加藤直次・ハツコ夫妻は明・享の両親、本間直吉・シン夫妻は、明・享の叔父・叔母です。北海道出身の父母は晩年を札幌の牧師館で暮し、教会で葬儀を営みました。叔父・叔母も小樽に住んでいましたので、最晩年は札幌の牧師館で過ごしました。そこで二組とも札幌教会墓地に納骨しましたが、兄も私たちも皆、関東暮らしなので、札幌から川越教会の墓地に移骨させていただきました。

[2] 死についての考え

さて、私たちは皆死にます。生まれた時から死に向かって歩き出す——これが私たちの人生です。そして葬儀では「ご不幸をお悔やみ申し上げます」あるいは「ご愁傷(お気の毒)さま」と挨拶を交します。すると私たちは、ご不幸、お気の毒という言葉で括られる人生を、生きていることになるのでしょうか。

以前「千の風になって」という歌が多くの人に感動を与えました。「私のお墓の前で泣かないでください。そこにわたしはいません。眠ってなんかいません。千の風になって、千の風になって、あの大きな空を吹き渡っています」。かけがえのない者が、或る日身近から居なくなってしまいます。消滅したのであれば、余りにも悲しくて耐えられません。でも千の風になって身近に生き続けてくれる。そしてこの肌で感じる事が出来る。これは大きな慰めです。聖書でも霊を風という言葉で表しますから、通じるものがあります。でも、人は死んだら、風になって愛する人の周りを吹き廻っているだけなのではないでしょうか。

何かに生まれ変わって、この世に生き続けるという形で、生と死を繰り返していくという輪廻転生を信じる人もいます。植物や動物に命が継承されるならともかく、名を変えて他の人間になるとしますと、この私も誰かの生まれ変わりということになります。気味が悪いと思いませんか？

十万億土の極楽目指して、冥土の旅に出かけるという人もいます。旅装束にお金や杖を持たせて火葬にします。或いは、霊魂が肉体の束縛から解放されて永遠に存在し続けるという霊魂不滅説。千の風になるという考えも、この流れでしょう。一切は全く消滅して無に帰すと考える人もいます。

作家の渡辺淳一は札幌医大の医者でした。その時こう書いていました。「死の先には何もありません。死んだら肉体は腐敗を始め、最後には精神もろとも見事なほどにさっぱりと消滅してしまうのだ」。

またその反対に「天国でまた会いましょう」という言葉もよく聞きます。死んだら天国に迎えられと考えるのですね。でも、私たちは皆、天国に行ける人間なのでしょうか。簡単に人を殺す事件が毎日のように起こります。親子・兄弟・友人の間でも争いが起こります。そのような私たちが、そのまま天国に移り住むとしたら、天国もこの世と変わらない所になってしまいます。ですから簡単に天国へ行けるとは考えるわけにはいきません。

シンガポールに居た時、イスラム教の教師からその教を学びました。イスラム教では、本人が生きていた間に行った善い行いが悪い行いよりも多ければ、天国に迎えられる。しかし悪い業が善い業が一つでも多ければ、地獄行き。死ぬ間際になって悪い業を続けて行くかもしれないので、余程良い業を沢山積んでおかなければ安心できません。

しかし確実に天国に行ける道がある。それが**殉教の死**を遂げること。すると本人ばかりでなく一族皆も天国へ行けます。そこで殉教志願の過激派になることを、家族の間でも歓迎されるのだそうです。これも困った信仰です。

では**聖書**は人の死をどの様に捉えているのでしょうか。聖書は死を先祖と共に眠りにつくると記します。地上のすべての氏族の**祝福の源**とされた**アブラハム**は、「満ち足りて死に、先祖の列に加えられました」(創世記 25:8)。孫の**ヤコブ**は「わたしが先祖たちと共に眠りについたならば、先祖たちの墓に葬ってほしい」(創世記 47:30)と息子の**ヨセフ**に誓わせています。あの**モーセ**も「あなたは間もなく先祖と共に眠る」(申命記 31:16)と主から言われていますし、**ダビデ**も**ソロモン**も「先祖と共に眠りについた」と記されています。火の戦車で天に上っていった預言者**エリヤ**だけが**唯一の例外**です(列王記Ⅱ. 2:11)。

主イエスも**死を眠りと呼び**、少女(マルコ 5:35～)、若者(ルカ 7:11～)、壮年(ヨハネ 11:！～)を、いずれも眠りから起こすように、死より生き返らせておられます。眠りには目覚める朝があります。死は**終わり**(The End)ではない——この信仰を受けて新約聖書は「**キリストが死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられた**」(I コリント 15:20)と受け取りました。

そしてこの主イエス・キリストが、**終わりの日**に再びこの世界に來られて、既に眠りについている者もその時生きている者も、全てを集めてお裁きになり、キリストの救いの恵みを受け容れる者のみが、天に備えられた神の都に迎えられるという**終末待望**の信仰が確立されていきました(マタイ 25 章、黙示録 21～22 章)。ですから旧新聖書全巻は「**アーメン、主イエスよ、来て下さい。主イエスの恵みがすべての者と共にあるように**」という言葉で終わっています。

私たちは、地上の生涯を終えたら眠りについて、キリストの再臨の日をお待ちするのです。信仰を同じくする**先祖と同じ墓で眠りにつき、再臨を待つ**——これが聖書の信仰です。

ところで、主イエスは、一緒に十字架につけられた犯罪人の一人が信仰を表明しますと、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に**楽園**にいる」とおっしゃいました(ルカ 23:43)。しかし主は墓に葬られ、三日目に復活されて弟子たちにご自身を現し、40日後にお一人で天に上げられていきました。ですから楽園と天国とは違いますね。では**楽園は何処**なのでしょう。

その手がかりは「**金持ちとラザロ**」の教え(ルカ 16:19~31)でしょう。**死後に**、乞食のラザロはアブラハムと共に**宴席**に着き、金持ちは**陰府**の苦しみにもだえています。としますと地上の生涯を終えて眠りについた者には、アブラハムと宴席を共にするような**平安な状態**と、炎の中でもだえ苦しむ**状態**と**二通りの過ごし方**があること、そしてアブラハムと宴席を共にする状態を「**楽園に居る**」と主はおっしゃったのではないのでしょうか。

眠りには夢が付き物です。生涯の色々な場面が夢に現れてきます。楽しい夢なら幸いですが、自分の罪深さの故に起こした、愛する家族や周囲の人々とのトラブルが次々と脳裏に浮かんできますと、**後悔に苛まれて**それこそ炎の中でもだえ苦しみ続けることになります。その上、私たちは夢を自分ではコントロールできません。これは恐ろしいことです。しかしその時に十字架の救い主を信じる信仰があれば、「大丈夫。その罪は私が代わりに引き受けて贖った。あなたは赦されているよ」という**主の声を聞く**ことが出来ます。そして**平安な眠り**をいただけるのではないのでしょうか。

[3] 枯れた骨の復活

今日の聖書は、エゼキエル書で一番有名な記事です。紀元前 597 年に南王国はバビロンによってエルサレムを占領され、**ヨヤキン王**以下重だつた民が捕囚となり、遠くバビロンの地に連れて来られました。祭司の子エゼキエル 26 才もその一人でした。ところが後を継いだ**ゼデキヤ王**もやがて反旗を翻し、11年後の**紀元前 587 年**にエルサレムの都も神殿も完全に破壊され、両眼をくりぬかれた王以下、貧しい民以外の殆どが捕囚となり、**王国は滅亡**しました。

それから幾年たった時のことでしょうか。エゼキエルは、神の霊に導かれて**骨が散乱する谷**の中央に立たされます。どの骨も甚だしく枯れています。主は彼に命じました。「**枯れた骨よ**、主の言葉を聞け。見よ、わたしはお前たちの中に**霊を吹き込む**。すると、**お前たちは生き返る**」。エゼキエルがその通りに預言すると、骨がカタカタと音を立ててつながり始め、骨の上に筋と肉が生じ皮膚が覆い、無数の人体が生まれました。「**霊に預言せよ**。これらの殺された者の上に吹きつけよ。そうすれば彼らは**生き返る**」。彼が預言すると、霊が彼らの中に入り、彼らは生き返って自分の足で立ち、非常に大きな軍団になったのでした。

谷を埋め尽くす枯れ果てた骨・骨——これはバビロンで捕囚生活を送る人たちの**絶望状態**を現しているのでしょうか。しかしこれは、彼らの**神の無力さ**の結果ではありません。神の御声に聞き従わず、

罪を犯し続けた民の**不信仰**に対する**神の裁き**でした。ですから33章で神はイスラエルの民にこう呼びかけて居られます。「わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ。立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から。イスラエルよ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか」(33:11)。

自分たちの前途に絶望している**枯れた骨**のような民に向かって、神はエゼキエルを通して語られました。「わたしはお前たちを**墓から引き上げ**、イスラエルの地へ連れて行く」「また、わたしがお前たちの中に**霊**を吹き込むと、お前たちは生きる。わたしはお前たちを**自分の土地に住ませる**」(37:13～14)。そして、神はこの約束を、50年後に実現されました。

[結] 墓を開いて引き上げてくださる主なる神

私は**永眠者記念礼拝**に示された今日の聖書から、13節「わたしが**墓を開いて**、お前たちを**墓から引き上げる**とき、わが民よ、お前たちは**私が主であることを知るようになる**」という御言葉が、特別に心に響いてきました。

私たちは愛する者の遺骨を大切に墓に納め、**平安な眠り**を続けるように執り成しの祈りを続けています。しかし**墓が終の棲家ではありません**。世の終わりの時が熟すると、神の御子・救い主キリストが天から下り、裁きの座に着かれます。すると**主なる神**が、ご自分で全ての**墓を開いて**、永眠者を**墓から引き上げ**、キリストの裁きの座に皆を連れて行かれる。そしてその時に「わが民よ、お前たちは、**わたしが主であることを知るようになる**」——その時に、神がまさに**主なる神**であることを知るようになるとは、どういうことでしょうか。

捕囚生活の前途に全く絶望してしまった民に対して、33章に記された主の熱い呼びかけを先程読みました。もう一度読み返します。「わたしは悪人が死ぬのを喜ばない」「立ち帰って生きることを喜ぶ」「立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から。イスラエルよ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか」。

これが**主なる神の心**なのですね。ですから主ご自身が、墓を一つ一つ開いて、眠りにについている者を一人一人引き上げて、キリストの前に連れて来ようとされるのですね。私たちは墓の中での長い眠りから起こされ、主の御手を通して伝わるその**熱い愛**を全身に受けながら、キリストの前に立ち審判を受けるのです。私たちは皆、その愛に促されて、「主よ、私の罪をお赦してください。あなたこそ救い主です」という告白をささげることが出来るのではないのでしょうか。**神の行き届いた愛の配慮**を現す言葉だと、私に響いてきたのです。

このように**全ての人**を、罪の滅びから救おうと心を砕く**神の愛**——本当に有難い恵みです。愛する家族にも、是非この恵みに与かってもらいたい。これは誰しもの願いではないのでしょうか。**親子親族が皆一緒に天国に迎えられて**、感謝と喜びに溢れた日々を永遠に送ることが出来たら、**最高の幸せ**です。愛する者が一人でも欠けていたら、本当に悔やまれます。ですから**信仰の継承**は、何よ

りも大切です。そのためにも、愛する大切な家族だった**故人の信仰を偲ぶ機会**を時々持つことは、とても有意義ではないでしょうか。

教会員の皆さんは、ご自分が**何処の墓で眠り**、主の来臨を待ちますか。葬儀は子どもたちが営みます。教会員でなければ自分たちの考えで葬るでしょう。でも川越教会の歴史を綴ってきて下さった教会家族の一人ひとりが、葬儀後に離散して、教会員の記憶からやがて消えていってしまうのは、悲しい限りです。教会としては礼拝を共にしてきた大切な**教会員の遺骨**は、教会墓地に預かり、追悼し続けていきたいものです。どうしても自分の家の墓にというのであれば、せめて分骨なり、墓石刻銘をして頂きたいものです。また教会員の皆さんも、後に遺る子どもや孫たちに、墓地を通して川越教会につながってもらい、同じ墓に眠る信仰者になるよう、信仰の継承を働きかけて欲しいと切に願います。

祈ります:主なる神さま。今日は10人の永眠者会員を覚えて礼拝を守ることが出来ました。感謝します。あなたの豊かな愛の御手に守られて、平安な眠りを続けることが出来ますように、お祈りします。ご家族の上にも、あなたの豊かな恵みをお注ぎください。また私たちの信仰が愛する家族に継承され、家族一同がもれなく、祝福に満ちた天国に迎えられるように、お導き下さい。救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。 アーメン